

山と博物館

第49巻 第10号 2004年10月25日

市立大町山岳博物館

企画展特集 伊藤孝一没後50年 **山岳映画誕生** 大正末、雪の絶頂にカメラを廻す
会期 10月2日(土)～12月5日(日)



薬師岳巖冬期初登頂のひとコマ 大正13年2月4日(伊藤都留子氏所蔵写真・立山博物館提供)

八十年前の山岳映画 今、その真価とは…

峯村 隆

本企画展では富山県「立山博物館」の協力により、伊藤孝一・百瀬慎太郎・赤沼千尋の三人が中心となった大正十二年「雪の立山、針ノ木越え(約四十分)」と、主に大正十三年の「雪の薬師・槍越え(約三十分)」のダイジェスト映像もDVD版で放映し、好評である。

いったいこの映像の何が人をひきつけるのか、私なりに考えてみた。

○確かな映画づくり

安全かつ周到な雪山撮影計画のもと、意図した映像をキッチリとフィルムに収めるまで、じっくり時を待ち、労を惜しまなかった成果が、どのシーンにもにじみ出ている。「現存する最初期の本格的な山岳映画」とされるゆえんである。北アルプスの雪山登山映像としても、現存する最古の映像であろう。

○伊藤独特の視点

伊藤は一連の雪山撮影山行のために、撮影技師を伴い、地元の山案内人を大勢雇い、膨大な物資を調達し、3棟の山小屋まで建てた。その額は現在換算で数十億円になるとも言われているが、莫大な資金はあくまで無償の趣味のためであって、商売とは無縁だった。

遊びつづけた山々、同行の人々、歩いたそこそこを、自分の家族や百瀬・赤沼・案内人たちとその家族に見せるために映画に撮ったそうだ。アマチュアイズムを貫徹したドキュメント映画だからこそ、臨場感があるのだろうか。

探究心に満ちた伊藤の視点は独特である。ダム湖に水没する前の有峰集落の姿、芦峯寺の人々の日常生活や山小屋作りの様子、山案内人たちの装束や何気ない所作…。

物好き大金持ちの単なる虚栄心からなら、雪の北アルプスを征服する將軍然として隊の先頭に立つ自分を誇らしげに記録させて喜ぶところだが、そうしたシーンはない。

○無限大の情報価値

ややもすると歴史のひとコマに静止してしまいそうな百瀬や赤沼が、生きて躍動する姿…。伊藤が意図して写し込んだテーマのほか、意図せずして遺された映像情報の価値は無限である。

(大町山岳博物館学芸員)

趣味の登山がアルピニズムを超えたとき(後)

—伊藤孝一没後五十周年に—

布川 欣一

③「雪の立山、針ノ木越え」

三月一日、越中の八人を富山へ発たせる。

伊藤ら五人は二日、明科から篠ノ井線に乗る。そばを食べるために長野下車、信越線の高田に至り宿泊。三日、山道具・スキーの店「山善」で登山靴などを補修、直江津を経て富山に宿泊。四日午後、立山山麓、芦峯寺に着く。

五日朝、勢ぞろいしたパーティは、大沢以来の八人に七人を加えて二十人。雄山神社に念願成就を祈願し降雪のなかを出発、藤橋・杉田の小屋に泊まる。六日晴れ、藤橋で肝を冷やす。長さ約三十mの橋は、積雪による落下を避けるため、板を外して骨組だけの裸状態だった。千寿ヶ原付近から積雪深く難渋、降雪激しく藤橋の小屋へ戻る。七日晴れて午後五時、立山温泉着。堀田と二十一日ぶりの再会を果たす。

八、九日は雪、雨、曇で停滞。十日晴、早朝、越中衆十一人が空身で発つ。(室堂迄ノ道踏ヲ目的ニシテ室堂ノ様子ヲ見ルコトヲ兼ス。吾々七時二十五分発、人夫五名ヲツケ)松尾峠越え、天狗平まで進んで戻る。十一、十三日、雪と雨で停滞。十四日晴れ、米や木炭などを鏡石の手前まで荷揚げする。

十五日、朝の好天に乗じて出発、松尾峠を越すが、(天狗平・室堂間、烈風降雪、四顧暗迷、咫尺を辨せず)、午前十時十五分、ようやく室堂着。午後四時ごろ、(烈風一遇、降雪止み碧空を仰ぐ)。十六日は(日本晴)。午前

七時十五分、頂上を目ざして室堂を出発。

頂上ノ登リハ夏ヨリ寧ろ安楽デアッタ。頂上ノ展望ハ筆話ノ論デハナイ。雄大ナ雪ノ剣、黒木ニ茂ル黒部ノ溪谷、意外ニ白イ鹿島ノ槍、(中略)不ニ、赤石、甲斐駒、木曾駒ノ遠望カラ薬師方面ニ至ル北アルプスノ全姿、總テ満目ニ入ル。持參ノ食パントハムノ一片ヲ喰ヒ終ツテ、頂上発。

勝野の映画撮影も快調。地獄谷を巡って一気に下山、午後七時三十分立山温泉帰着。十七日、立山温泉発、大鷲西の肩から越中沢乗越を経て黒部川の平に着く。この日、任を果した堀田は芦峯寺へ下る。十八、二十日は雨で平の天幕に停滞。二十一日、快晴が戻る。修理した箆の渡しを使って黒部川渡河、(針ノ木澤ニ入ル。雪面結氷、歩行進捗。南斜面ノ樹氷鮮麗。午前十一時五十分、針ノ木峠頂上着)。箆川に面した大雪庇を割って降る。

一行は、「大澤、ヤイ」「大澤、ヤイ」と絶叫し続け、大スバリ、針木・蓮華と取り囲まれた、ベタ一面の雪の下界へ、己の影に一足一足を踏み込みながら降った。

午後四時四十五分、大沢石室着。石室には福林の置手紙があった。十五日から十九日まで松高山岳部員三人で滞在した、黒部の平で出迎える積もりだったが焚火の煙で眼を傷め下山する、立山滞在中の伊藤らを追い越し十七日に針ノ木峠越えしてきた四高(旧制、

金沢)の窪田他吉郎らに会った、などが記されていた。

二十二日も晴れ、伊藤らは前後三十一日を過ごした雪山から、全員無事に大町へ戻った。

④「雪の薬師、槍ヶ岳縦走」

一九二三年暮から春、伊藤は、雪山大縦走と映画撮影の第二段階を展開するが、その周到な準備をすでに二十三年夏前から進めていた。

伊藤は芦峯寺、立山温泉を経て七月二十八日、立山西南麓の有峰に入る。電源開発用貯水池に沈む戸数十二の有峰に、村びとはもう住んでいない。伊藤は、旧家・岩段家の家屋と米倉を活用した。雪山大縦走に備え、要所に山小屋建設を決断し、それらさまざまな準備の拠点にしたのである。堀田夫妻が現地に常駐、煩雑な仕事すべてを差配していた。山小屋の建設場所は真川源流の台地、上ノ岳の肩、黒部乗越、薬師沢の四か所、すべて伊藤自ら設計した。八月二日有峰発、冬に予定のルートをとどつて五日槍ヶ岳、六日燕岳へ。

伊藤による「雪の薬師、槍ヶ岳縦走」は、前後三回の活動から成っている。

最初は積雪期上ノ岳(北ノ俣岳)初登頂の一九二三年十二月。十一月二十九日に真川の小屋入り。十二月三日に二人が上ノ岳小屋へ先発。五日朝七時半、伊藤ら総勢九人が真川発、太郎山鞍部から小屋を経て(十二時二十五分、上ノ岳頂上着。冬ハ誰も登ツテナイ。冬季初登攀トナロウカ。胸ガサワグ)。小屋で昼食、スキーで下山。四時五分真川着。榎谷徹蔵・藤木九三、真川の小屋から上ノ岳登頂は二十四年一月一日だ。

二回目は、厳冬期薬師岳初登頂の二四年



大正12年3月21日、雪の針ノ木峠に立つ(百瀬堯氏所蔵写真)

二月。伊藤は年末年始を名古屋で過ごし、一月八日、芦峯寺に着くが雪道に難渋、十五日ようやく、真川の小屋に入る。薬師岳登頂に備えた上ノ岳の小屋への荷揚げ、また熊狩りやカモシカ猟などの撮影、スキーの練習。三十日、小屋を使わず真川から一気に登頂を試みるが、天候が急変、頂上直下から吹雪のなかを逃げ帰る。晴天の二月一日、上ノ岳の小屋に入るが、また吹雪。四日未明、吹雪が止み快晴、伊藤ら十五人は五時に小屋を出る。スキーで降ったが、鞍部ではワカンを着けても腰まで沈むラッセル。頂後近く、雪面がクラストしてアイゼンに着け変える。

十二時半、薬師岳頂上着。冬ノ薬師ハ何人モ頂ヲ踏ンデナイ。胸ガ高鳴ル。薬師堂ノ壮麗ナエビ根ノ前ニ手ヲ合ワセ、如来ニ登頂ヲ報告スル。目頭ガ熱クナツタ。全員ト握手ヲ交ワシ、肩ヲ叩キ合フ。



大正13年4月19日、槍の絶巔に立つ
(伊藤都留子氏所蔵写真・立山博物館提供)

一九九七年夏、羽田栄治氏・吉井亮一氏らが伊藤の足跡を実施検証し、上ノ岳の小屋の遺構確認など成果を挙げた。薬師岳登頂のルートは、上ノ岳の小屋からスキーで薬師峠へ下降、現在の夏道に近いコースをとったと推測される。

最後の三回目は、真川から上高地へ大縦走を果たした二四年三、四月。伊藤の真川入りは三月十九日、準備を整え三十一日出発。伊藤、勝野兄弟、奥村の四人を二十九人が支える大パーティは、もう真川へ戻らない。上ノ岳の小屋に入り、四月十日に黒部乗越の小屋に移動するまで拠点とする。薬師平や雲ノ平などに向き、小屋や天幕を使って黒部源流の冬を撮影、大雪崩も捉えた。黒部乗越では、三保蓮華を中心に鷺羽、ワリモ、水鼠祖父などへ足を伸ばす。

四月十五日、雨の中を進み、双六池畔でサポート隊(百瀬が率いる十五人)と合流(慎太郎氏

ノ友情ニ迎エラル)。十六日、西鎌尾根から槍の肩をこえ赤沼が待つ殺生小屋へ。ここを拠点に、快晴の十九日、撮影器材を槍の穂先へ運び揚げ、大展望三六〇度をフィルムに収める。二十日の大喰岳が最後の撮影ポイントだ。二十一日上高地へ。槍沢、梓川は雨、ヘズレネズミ姿デ温泉着。二十三日徳本峠越え、島々に入ると山桜が咲いていた。

IV 「桁外れの山好き」が放った ひとすじの光芒

①ふたつの遭難事故の狭間を縫って
伊藤らが雪の立山、針ノ木峠越えを実行した一九二三年の積雪期には、登山史上によく知られるふたつの事故が発生している。

ひとつは、一月十五日、板倉が松尾峠で疲労凍死した事故。榎、三田と三人で厳冬の立山にスキー登山中、暴風雪に遭って立山温泉に戻る途中だった。いまひとつは、三月五日夜半、小林喜作が雪崩に襲われて長男とともに死去した事故。爺ヶ岳西山腹、棒小屋沢の猿小屋で就寝中だった。喜作はカモシカ猟に抜群の腕をみせ、大天井岳と槍ヶ岳東鎌尾根に新道を拓き殺生小屋を開業したばかり。

このふたつの事故は、トップクラスと目される三人の登山家、北アルプス南部の伝説的な山人を以てしても、なお抗しえなかった大自然の猛威を改めて認識させ、登山関係者だけでなく広く衝撃を与えた。

榎らの遭難は、伊藤らの大沢石室視察最終日で、その報は大町に戻って知る。二か月後、伊藤らは板倉の命を奪った松尾峠を二度往復、立山登頂を果たし映画撮影にも成功を取めた。伊藤らが立山温泉と松尾峠と室堂と立山山

頂を踏破したプロセスは、先述の通り、人手と時間をかけて慎重そのものだった。登路の状態を把握し丁寧なルート作業を施す、山小屋(室堂)の状況を調査し、長期滞在に備えて米や燃料を荷揚げする、そして好天を待つ。立山登頂に関する限り、伊藤は安全にして確実な手順を踏んで、当時第一級と目されるアルピニストに勝る成果を挙げた。

針ノ木峠越えを控えて黒部の平に停滞中、伊藤らは喜作遭難を知る。遭難現場と峰続きの針ノ木峠。登降する谷筋は雪崩の巣窟だが、前夜の低温で雪は堅く締まっていた。

こうして伊藤は、時間・空間ともにふたつの大事故に挟まれた行動を無事に乗り切った。そして次の積雪期シーズン、伊藤は次の三件を近代日本登山史上に記録するに至る。

一九二三年十二月五日

上ノ岳積雪期初登頂

一九二四年二月四日

薬師岳厳冬期初登頂

一九二四年三月三十一日と四月二十一日

真川と黒部五郎岳と双六岳と槍ヶ岳

積雪期縦走
そのすべてに本格的な記録映画を添えてある。

②山を遊び尽くす快適な拠点づくり

伊藤は自らの登山活動に費用を惜しまなかった。四か所に山小屋を建てる、山案内から大勢を長期間雇い入れる、多人数の山中生活に用いる食糧や生活物資を賄う、最新の登山用具や装備を調える、加えて山岳映画撮影用の新鋭器材や高画質フィルムを準備する、などで桁外れの金額だったが……

伊藤は、芦峯寺の総代・佐伯静に二十万円を手渡したという。赤沼は一九七五年刊「山

の天辺」中で、二十坪の家が一五〇円で出来たこと、今(仮りに一軒一五〇万円としても)二十億円になると試算する。これが支出のすべてではあるまいから、総額は、大編成のヒマラヤ遠征をはるかに凌駕する規模に達しよう。それゆえ伊藤の登山活動は、「大名旅行」放蕩」と柳榆や不快感を呼びおこしもした。

「雪の立山、針ノ木峠越えの際、伊藤は前後三十泊三十一日を費やした。ルート上に既設の小屋を利用、大沢石室七泊、立山温泉九泊、平四泊、他に転進中の対山館など十泊。とくに大沢石室の居住性や暖房の劣悪さには辟易させられた。二シーズン目、長大な縦走を含む登山を計画した山域に、まだ山小屋はない。伊藤は、山小屋建設を決断した。

伊藤にあつて山小屋は、単に通り返るだけの通過点ではなく、多彩な登山活動の重要な拠点なのだ。長期滞在して、登頂し、周辺を探索し、狩猟やスキーを楽しみ、映画を撮影し、縦走準備を整える。山中だから粗食や不自由に耐えて当然、とは考えない。おいしい食事、快適な睡眠、寒さや荒天にも脅かされなかつたから、自ら調えたのだ。真川の小屋では、堀田ら夫婦の常駐者を置き、養鶏、野菜栽培、豆腐つくりをさせ、風呂も備えた。

その真川の小屋をベースに、伊藤は三つの山小屋をほぼ一日行程の場所に配置した。食糧や物資を多くの人手を充ててピストン式に荷揚げし、尺取虫のように前進し登頂する極地的手法も用いた。しかし、伊藤の山小屋はすべて、自分の登山の便に供する施設であつて、営業を意図したものではない。使用後、伊藤は三つの山小屋を芦峯寺の管理に



真川の小屋を出発し太郎山へ向かう

(伊藤都留子氏所蔵写真・立山博物館提供)

委ね、建築許可を得なかつたらしい薬師沢の小屋は、縦走出発前に焼却した。伊藤が支出した山小屋建築費は、投資ではなく登山の経費だった。

その後も伊藤の山小屋は使用者があつた。たとえば一九二五年三月の窪田らは、真川の小屋から薬師岳登頂。加藤文太郎は、三〇年十二月に大多和峠から真川の小屋に入り三十一日泊、三一年一月一〜三日、上ノ岳の小屋に泊まり薬師岳登頂、後立山の烏帽子岳へ単独縦走を果たす。真川以外の山小屋は、曲折を経るが、形を変えながらほぼ同位置で現在に引き継がれている。

③「登山史」に交錯する毀誉褒貶

俺は山へ遊びに行くのだから、面白ければ一カ月でも、二カ月でも山の中にいるが、危いと見たり、苦痛を感じたり、人間として

てこれは嫌だと言ふ気が生じたら、直ぐ尻に帆をかけて逃げ帰るから安心せよ。

伊藤が山へ出るとき、妻や家族にあてて書き置いた手紙の一節である。伊藤の登山観が端的に示されている。「趣味の登山者」と呼んでよからうか。恵まれた経済力と環境を活かし、徹底的に「山を遊ぶ」楽しみに耽つた男。

最も強く惹きつけられた山域で、登頂や縦走に費やした日数は、立山登頂に立山温泉入りから十日、上ノ岳に真川入りから七日、薬師岳は二十一日、真川く上高地縦走は三十四日。映画撮影の天気待ちを考慮しても、破格に多い。(自然に対し徹底的に臆病たるべきこと)を旨に、石橋を叩く慎重な手順を踏む。結果として、第一級のアルピニストを超える登頂、アルピニズムの旗手たちに先じた初登頂や初縦走を達成したパイオニアワークとなった。その感動を、伊藤は「日記」などに書きつけている。だがそこには、「より困難」への挑戦や冒険、征服といった気負いも悲壮感もヒロイズムもない。あるのは、憧れ続けた夢をようやく手中にした歓喜である。(天地の荘厳に接し、これを享楽する)静観派的とさえいえる、風雅な趣味の人の登山である。

太平洋戦争後、最も早く伊藤の業績を発掘したのは上田竹三である。上田は当時の新聞記事から伊藤の活動を知り、調査を進めてフィルム発見に至る。一九七三年、「山岳」に「伊藤孝一の足跡」を発表、(雪山縦走に先鞭をつけた)と評価する。だが、アルピニズム正統派を以て任ずる人びとによる「登山史」では、伊藤評価は概して疑問符つき状態だ。

安川茂雄「近代日本登山史」(一九七六年)は、伊藤らの縦走を(山岳映画撮影のため)と断じ、そんな「遊び」にひとしい仕事への大金投

入に(ほとほと感心)し、(桁外れの山好き)の(山への放蕩ぶりに脱帽)と書く。山崎安治「新稿・日本登山史」(一九八六年)は、積雪期登山の初期、登頂活動だけのなかで(北アルプス核心部)縦走は(画期的なもの)とする。が、学生陣とは別の(特異なもの)、金の力による(大名旅行)だと登山界は好感をもたなかった、と加える。斉藤一男「山の文化」とともに「二〇〇四年)も伊藤の活動を映画撮影行として紹介、見出しは「新馬鹿大将」としている。

瓜生卓造は伊藤の生涯をたどる「雪嶺秘話」(一九八二年)を著わした。「あとがき」で(大登攀)が日本登山史で抹殺状態だと指摘、(一握りのエリートと自称する人々に牛耳られてきた)山の世界を批判し歪曲を糾したい、と結ぶ。菊池俊明「北アルプスこの百年」(二〇〇三年)の赤沼に関する記述中には、日本山岳会の一部で伊藤の快拳を評価しないのが不愉快らしいふたりは脱会に至った、とある。

完成した映画の「日本アルプス雪中登山活動写真會」は、東京、大阪、名古屋、松本、金沢などの諸都市で開催され盛況だった。伊藤は会場にはほとんど行かず、フィルム一式を宮内省に献上した際と、福林・窪田の高校山岳部主催の上映会に出向いた程度だった。再編集版を見ても、映画は雪山の景観、風物を鮮明に捉えていて美しい。加えて登山行動の実態や和風と欧風が入り混じる登山用具装備なども把握でき、記録および資料的価値は高く、貴重である。

④「桁外れの山好き」へのオマージュ

伊藤は、アルピニストのように「より困難な」登攀や冒険を追求しはしなかった。「困難」は経済力で回避する方策を講じつつ、より美

しい空の色」を求めて登った。百瀬、赤沼ともども、(雀躍りして喜んだ)のは、

冬の立山と針木峠で仰いだ空の色である。就中、室堂の暁に嶺々へ被さった空の色、夫れは何とも形容の出来ない色だった。

その「空の色」を見るかす伊藤の眼は、湖底に沈む有峰で、木彫狛犬の民俗文化的資料価値を見抜く眼でもあった。伊藤が購入し散逸を免れた八体は現在、大山町歴史民俗資料館が収蔵する。

ブルジョアの色彩濃厚な「桁外れの山好き」は、大正デモクラシー時代の「リベラルな空気を吸い、ひととき、个性的で鮮烈な光を放つて退場した。栄光にも営利にも無縁で清すがしかった。京屋吉兵衛七代目のロマンと美学を、そこに見いだす。【おわり】

付記 本文中、出典を挙げない引用部分——
一字下げ組み、()内——は、すべて「伊藤孝一遺稿」(伊藤家所蔵)に拠り、適宜ルビを付した。使用の許諾をくださった伊藤家のご好意に謝意を表したい。

(登山史研究家)

※この論考は富山県(立山博物館)の平成十六年度企画展「山嶽活劇」に関連して書き下ろされた原稿を、筆者と富山県立山博物館の許可を得て転載したものである。

山と博物館 第49巻 第10号

発行 二〇〇四年十月二十五日発行

〒398-0002 長野県大町市大字大町八〇五六―一

市立大町山岳博物館

TEL 〇二六―二二〇二―

FAX 〇二六―二二〇二―

E-mail: smpk@city.omachi.nagano.jp

URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/smpk/

印刷 株 奥村印刷

定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)

郵便振替口座番号 〇〇五〇四―〇七―一三三九三